



Title	被災者支援における広域避難女性の役割と支援実践に関する研究―「よそ者」の経験に着目して―
Author(s)	Li, Jing
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/105396
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (LI JING)

論文題名

被災者支援における広域避難女性の役割と支援実践に関する研究
—「よそ者」の経験に着目して—

論文内容の要旨

本論文は、東日本大震災および原発事故によって広域避難を経験し、避難先において支援実践に関わる広域避難女性がいかに支援の役割を構築していったのか、その過程と意味を明らかにすることを目的とするものである。本研究では質的研究のアプローチを採用し、東日本大震災および原発事故後、日本各地で何らかの支援活動に携わった広域避難女性17名を対象に半構造化インタビューを実施するとともに、岡山にある広域避難者当事者団体において1年間のフィールドワークを行った。分析においては、広域避難女性が避難先の地域社会において「よそ者」として位置づけられながらも、どのように支援実践に関与し、新たな役割を形成していったのかを、個人、集団、そして地域社会という三つのレベルから検討した。

第1章では研究の背景と問題意識を、第2章では脆弱性・レジリエンス・ジェンダー・「よそ者」概念を用いた理論的枠組みを提示した。第3章では質的研究アプローチの研究方法を述べた。第4章では、調査協力者の17名の広域避難女性の支援活動をリーダー型、参加型、媒介型の三類型に整理した。本章の分析を通じて、以下の三点が明らかになった。1. 広域避難女性のよそ者性は、単なる脆弱性ではなく、支援実践を可能にする契機ともなりうる。避難先で経験した周縁化は、支援制度や地域社会を批判的に捉える視点を育み、同じ境遇にある他者との連帯の基盤を形成する契機となっていた。2. 支援実践への関与過程は単線的な過程ではなく、中動的な性格を持っていた。彼女たちは支援の場に参加する中で、他者を支えると同時に自らも支えられるという相互関係の中で、徐々に支援者としての役割を形成していった。3. ジェンダーは支援実践において両義的な影響を及ぼしていた。ケアの責任は活動への参加を制約する一方で、支援実践を支える重要な要因となっていた。

第5章では、支援実践に関わる広域避難女性の「二重のよそ者性」に焦点を当てた。広域避難女性は支援実践を通じて「支援する被災者」としての新たな立場を獲得したが、同時に新たな困難にも直面していた。「リーダー型」の女性は、一般支援者との価値観や方針の相違による葛藤、避難者コミュニティ内部における支援する側と受ける側の階層化、支援スタイルの違いによる分断といった問題を経験していた。これらの分析から、避難先社会で「よそ者」であることに加え、支援者コミュニティや避難者コミュニティ内部でも再び「よそ者」として位置づけられる「二重のよそ者化」が生じていることが明らかになった。

第6章では、岡山での参与観察をもとに広域避難女性の支援実践を分析した。彼女たちは避難先地域社会において、避難者同士をつなぐ場の創出者、および広域避難者支援制度の変革の担い手という二つの役割を担っていた。避難者支援への社会的関心が薄れる中、将来の災害に備えて支援プロジェクトを立ち上げ、多様なアクターとの協働を通じて災害支援の新たなネットワークを形成していった。彼女たちは十数年の避難生活の経験を将来の災害対応に活かすとともに、忘却されつつある震災と避難者の存在を可視化し、社会的認知を促す役割も果たしていた。

第7章では、広域避難女性たちが「よそ者」であるがゆえの脆弱性を経験しながらも、その「よそ者性」を活かし共感や連帯を生み出していたことが明らかとなった。また、支援実践への関与を通じて新たな排除や再周縁化が生じる「二重のよそ者化」という現象を確認し、「支援する被災者」への心理的・制度的支援の必要性、および女性リーダーを支える制度的基盤の整備の重要性を提起した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (LI JING (李 婧))			
論文審査担当者	(職)	氏 名	
	主 査	教授	大谷 順子
	副 査	教授	岡部 美香
	副 査	准教授	宮本 匠
	副 査	講師	伊東 さなえ
論文審査の結果の要旨 本論文は、東日本大震災および原発事故によって広域避難を経験し、避難先において支援実践に関わる広域避難女性がいかに支援の役割を構築していったのか、その過程と意味を明らかにすることを目的とするものである。本研究では質的研究のアプローチを採用し、東日本大震災および原発事故後、日本各地で何らかの支援活動に携わった広域避難女性17名を対象に半構造化インタビューを実施するとともに、岡山にある広域避難者当事者団体において1年間のフィールドワークを行った。分析においては、広域避難女性が避難先の地域社会において「よそ者」として位置づけられながらも、どのように支援実践に関与し、新たな役割を形成していったのかを、個人、集団、そして地域社会という三つのレベルから検討した。 第1章では研究の背景と問題意識を、第2章では脆弱性・レジリエンス・ジェンダー・「よそ者」概念を用いた理論的枠組みを提示した。第3章では質的研究アプローチの研究方法を述べた。第4章では、調査協力者の17名の広域避難女性の支援活動をリーダー型、参加型、媒介型の三類型に整理した。本章の分析を通じて、以下の三点が明らかになった。1. 広域避難女性のよそ者性は、単なる脆弱性ではなく、支援実践を可能にする契機ともなりうる。避難先で経験した周縁化は、支援制度や地域社会を批判的に捉える視点を育み、同じ境遇にある他者との連帯の基盤を形成する契機となっていた。2. 支援実践への関与過程は単線的な過程ではなく、中動的な性格を持っていた。彼女たちは支援の場に参加する中で、他者を支えると同時に自らも支えられるという相互関係の中で、徐々に支援者としての役割を形成していった。3. ジェンダーは支援実践において両義的な影響を及ぼしていた。ケアの責任は活動への参加を制約する一方で、支援実践を支える重要な要因となっていた。 第5章では、支援実践に関わる広域避難女性の「二重のよそ者性」に焦点を当てた。広域避難女性は支援実践を通じて「支援する被災者」としての新たな立場を獲得したが、同時に新たな困難にも直面していた。「リーダー型」の女性は、一般支援者との価値観や方針の相違による葛藤、避難者コミュニティ内部における支援する側と受ける側の階層化、支援スタイルの違いによる分断といった問題を経験していた。これらの分析から、避難先社会で「よそ者」であることに加え、支援者コミュニティや避難者コミュニティ内部でも再び「よそ者」として位置づけられる「二重のよそ者化」が生じていることが明らかになった。 第6章では、岡山での参与観察をもとに広域避難女性の支援実践を分析した。彼女たちは避難先地域社会において、避難者同士をつなぐ場の創出者、および広域避難者支援制度の変革の担い手という二つの役割を担っていた。避難者支援への社会的関心が薄れる中、将来の災害に備えて支援プロジェクトを立ち上げ、多様なアクターとの協働を通じて災害支援の新たなネットワークを形成していった。彼女たちは十数年の避難生活の経験を将来の災害対応に活かすとともに、忘却されつつある震災と避難者の存在を可視化し、社会的認知を促す役割も果たしていた。 第7章では、広域避難女性たちが「よそ者」であるがゆえの脆弱性を経験しながらも、その「よそ者性」を活かし共感や連帯を生み出していたことが明らかとなった。また、支援実践への関与を通じて新たな排除や再周縁化が生じる「二重のよそ者化」という現象を確認し、「支援する被災者」への心理的・制度的支援の必要性、および女性リーダーを支える制度的基盤の整備の重要性を提起した。 以上、論文審査の結果、本論文は博士（人間科学）の学位を授与するのにふさわしいものと判定した。			